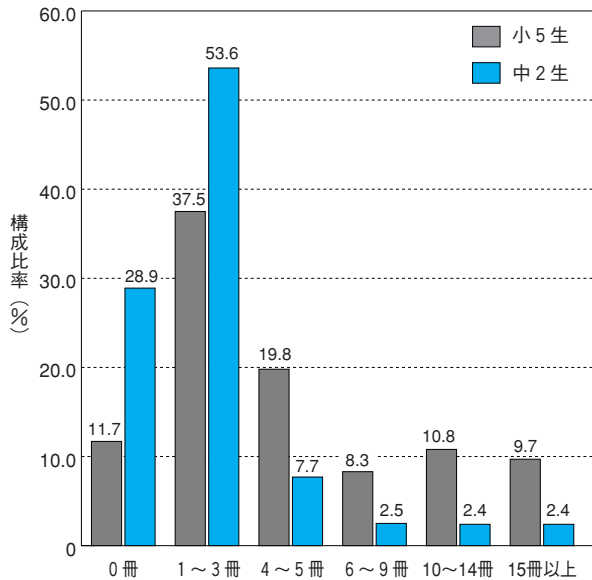


# Topics 1 「読解力」と読書指導との関係

「読解力」は読書の量が増えても頭打ちになる傾向があり、子どもたちの読書指導に改善の余地がうかがえる。

図表1 「最近の1ヶ月」の読書量の分布



図表2 読む本のジャンル

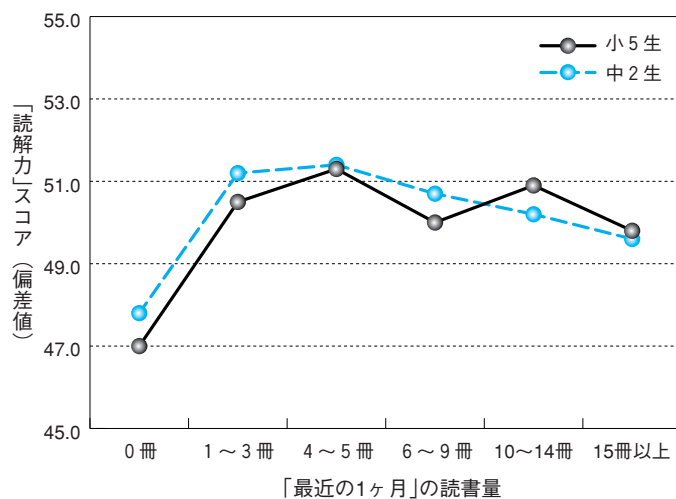
(複数回答)

本のジャンル	小5生 (%)			中2生 (%)		
	1. よく読む	2. ときどき読む	計	1. よく読む	2. ときどき読む	計
小説や物語・紀行文・随筆・童話などの文学の本	31.9	32.8	64.7	35.9	21.0	56.9
歴史や偉人の伝記の本	14.0	25.1	39.1	4.1	10.7	14.8
政治や経済、法律などの社会科学に関する本	1.6	6.6	8.2	1.1	3.4	4.5
自然科学や技術に関する本	8.4	19.4	27.8	2.6	7.7	10.3
哲学や宗教に関する本	1.1	4.9	6.0	1.0	3.7	4.7
社会問題・時事問題を扱った本	2.4	8.8	11.2	1.7	5.5	7.2
農業・工業・商業・通信や貿易など産業に関する本	3.8	12.4	16.2	1.1	2.4	3.5
音楽や美術、演劇など芸術に関する本	7.0	17.3	24.3	5.0	12.0	16.9
その他	9.9	7.4	17.4	5.3	3.5	8.9

図表1から、小5生、中2生ともに、1ヶ月に読む本数は1～3冊の子供が最も多いことがわかる。1冊も本を読んでいない子どもが小5生で約1割、中2生では約3割となっており、中学になると小学校時代よりも本を読まなくなる傾向を示している(図表1中の数値の合計が100%にならないのは、無回答ならびに100冊以上の記入のあった子どもは除外しているため)。

図表2は、読む本のジャンルについて、「1. よく読む」「2. ときどき読む」「3. あまり読まない」「4. まったく読まない」の4件法で問うた設問の回答結果を示したものである(「1. よく読む」「2. ときどき読む」についてのみ表示)。小5生、中2生ともに、「小説や物語・紀行文・随筆・童話などの文学の本」を読む割合が最も高くなっているが、次いで割合が高いのは、小5生では「歴史や偉人の伝記の本」であるのに対して、中2生では「音楽や美術、演劇など芸術に関する本」となっており、小5生→中2生の読書傾向の変化が見てとれる。この読書傾向の変化は、子どもの成長に伴う必然的な変化の側面も考えられるが、「自然科学や技術に関する本」や「産業に関する本」などでの小5生と中2生の間大きな違いは、理科離れや社会への関心の希薄化を反映している可能性もある。子どもの視野を広げさせ、自然・社会・人間に関する幅広い知識や関心を培っていくことは、高い「読解力」を達成していくためにも大切であり、そのためにも、「文学」関係に偏りがちな今の読書傾向から、多様な分野の本(や情報源)にも興味を持たせ目を向けさせるような指導が求められていると考えられる。

図表3 読書量と「読解力」との関係



図表3は、「読解力」が読書の量が増えても伸びず、1ヶ月に4～5冊程度のところで頭打ちになっている状態を示している。もとより「読解力」は読書の量のみで規定されるものではない。しかし、OECDのPISA調査から、国立教育政策研究所の有元秀文総括研究官が、読書時間と「読解力」の関係について、日本と「読解力」世界一のフィンランドとの結果を比較分析した結果によると、フィンランドの子どもの場合、読書時間が多くなるほど「読解力」の成績が高まる関係があるのに対し、日本の子どもは、読書時間が多くなっても「読解力」は頭打ちになっている傾向が示されており、今回の結果は、これに相通じるものと考えられる。

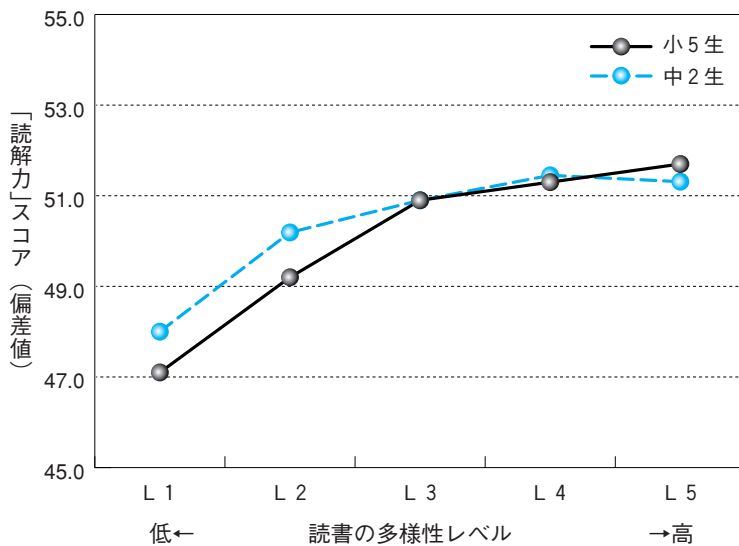
日本の子どもたちの読書の在り方に改善の余地があることを端的に示すものと言えよう。

(上記のフィンランドと日本の子どもの比較分析の詳細については国立教育政策研究所の有元秀文総括研究官のHPを参照。)

# Topics 1 (つづき)

多様な分野の本を幅広く読んでいる子どもほど「読解力」が高い傾向がある。

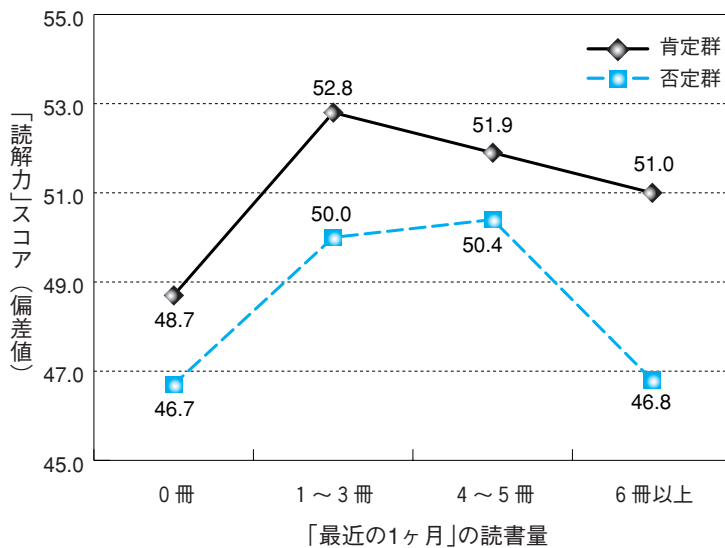
図表4 読書の多様性レベルと「読解力」との関係



図表4は、前ページの図表2に示す読書のジャンルについて、各ジャンルの回答合計に基づき、上位から7%、24%、38%、24%、7%の割合に準ずる形でL5からL1の5つのレベルを設定し、「読解力」スコアとの関係を見たものである。このレベルが高い子どもほど、多様なジャンルの本を幅広く読んでいる子どもに相当している。図表からわかるように、レベルが高くなるとスコアの伸びはやや鈍化するものの、読書の多様性レベルが高くなるほど「読解力」スコアが高くなる傾向を示している。前ページで触れたように「幅広い読書」の大切さを実証している。

適切な読み方や読んだ内容の活用の指導が「読解力」を高める。

図表5 読書指導を受けた経験の有無と「読解力」との関係 <中2生>



肯定群：下記の2つの問をいずれも「とてもあてはまる」「まああてはまる」と肯定的に回答している子ども

否定群：下記の2つの問をいずれも「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と否定的に回答している子ども

問14-4  
「読んだ本や調べた資料を要約したり、自分の意見を書いたり発表したりする。」  
問14-5  
「教科書や読んだ本の文章を、根拠や理由を示しながら批評し合う。」

図表5は、前ページの図表3に示したものを、中2生について、「読んだ本や調べた資料を要約したり、自分の意見を書いたり発表したりする」、および、「教科書や読んだ本の文章を、根拠や理由を示しながら批評し合う」という2つの読書(読解)指導を受けた経験の有無で分けて見たものである。

読書量は増えても「読解力」は頭打ちという傾向は変わらないものの、当該の読書指導の経験の肯定群は、否定群に比べて、どの読書量の段階でも「読解力」スコアが高くなっており、とくに「6冊以上」は、両群の格差が最も開いている。

このことは、本は読み放しにするのではなく、適切な読書指導を行うことの重要性を示している。

言うまでもなく、ここで読書指導としてあげた取り組みは、その例にすぎない。「読解力」の向上につながる読書指導は、これら以外にも豊かに構想して行くことが可能だろう(今回の調査において設定した「読解力向上のための取り組み」の項目参照(巻末資料編))。

現在、「朝の読書タイム」などで「ただひたすら読む」ことをコンセプトにした読書活動に取り組む学校も多い。今回の結果は、必ずしもこの活動自体を性急に改めることを求めるものではなく、学習活動全体の中で、適切に読書指導が組み込まれることの必要性を示唆しているものであることを付記しておきたい。